

戦後宮古の軌跡（概要） ～文化活動・民衆運動を中心に～

はじめに

本稿は主として一九八〇年代以降、職務の必要にせまられて、あるいは各種機関（団体）等の要請で、当該機関等の関係紙誌や地元紙等に発表した拙論を内容は大方そのままにして、一定の形をととのえ、改めて公表するものです。当該機関等の要請趣旨にそつてはいるが、状況によつては一九五〇年代まで遡り、あるいは私的分野にまでふれざるを得ない場合もあつて、ある種「自分史」めいた一面も備えています。

それゆえ表題は「戦後宮古の軌跡（概要） ～文化活動・民衆運動を中心に～」としましたので、大まかに「文化活動」「民衆運動」「軌跡」の三部構成にしてあります。もつとも自分史めいているといつてもすべて当時の内外の情勢や宮古内の各種動向、人の動き等を反映しており、「地域史」であることに変わりはなく、同時に己の生きた証でもあると愚考しています。そのため少なからず重複するところもありますが、これとて当時の世相の反映でもありそのままにしておきます。繁雑さは避け難いがご了承下さい。

また表題に即していえば「文化活動」の一環としての優良映画の「自主上映運動」や「うたごえ運動」等については今回は割愛しました。後日機会があれば何らかの形で公表できればと考えています。

なお本稿は、二〇一五年三月、当宮古島市総合博物館の「紀要」19

号に収録した「回想の戦中平良（宮古）のまちと周縁～疎開・教育・暮らしの周辺～」と共通するもので、その姉妹編としてご一読いただければなお幸いに思います。

第一部 文化活動（12項）

第二部 民衆運動（18項）

第三部 軌跡（13項）

おわりに

第一部 文化活動

1. 詩集「カオス」への回想

詩集「カオス」は、川満信一大兄のさそいで参加した故砂川玄徳と仲宗根の三人で、一九五八年十月に出した文字通り手づくりの詩集である。

川満大兄が沖縄タイムス社の宮古支局長として単身赴任してきたのは、前年の一九五七年十二月であった。その年、沖縄タイムス社で労働組合結成の動きがあつて、その中心的役割りを果たしていたのが新川明氏と川満大兄で、会社側は組合対策として、新川氏を鹿児島支局へ、川満大兄を宮古支局へ移動させたのだ、ともつぱらの噂さであった。色白の細身で、スマートな風貌の川満大兄の噂さは、琉球大

学在学中は文芸部ばかりか、社交ダンスクラブの部長をしていたというおまけまでついていた。そのころ平良のまちには十軒近くもダンスホールがあつて、毎夜賑わっていたせいもあるうか。

宮古支局は、戦前派には「中尾（酒造）の裏通り」、戦後は「平和館通り」と通称されていた、閑静な通りの東の十字路近くに面した、木造瓦葺きの、当時としては比較的大きな平屋の一戸建てであった。先住の高齢者夫婦は裏座に移ってもらい、玄関付き表座敷の三間を支局に占領していた。何でも医師で平良市長の口ききで支局に開放させたというので、「沖繩タイムス」は大した威力だ、とこれも同時の噂さである。

酒好きで社交性豊か、おまけに単身赴任の川満大兄の常住する住宅兼用の支局には、いつか夜ともなると地元紙の若い記者たちが押しかけ、たむろするようになった。川満大兄にとつては本社へ送る記事の情報源にもなっていたようで、一挙両得であったのであろう。当然のことのようにいつでも酒が準備されていた。そのなかで川満大兄のよびかけに応じて、雑誌づくりに参加したのが、今は故人となった砂川と仲宗根の二人というわけである。

こうして夜ともなると、「タイムス」の宮古支局は三人の詩誌づくりの作業場と化した。深夜遅くまで作業していることを何処で聞きつけたのか、毎夜のように酒に酔った市長が押しかけてくるようになった。まったく他意はなく一緒に酒をのもうというだけのことなのだが、市長には奇癖があつて、酔うと誰れ彼れおかまいなしに隣席にいる人の耳を噛もうとするのである。酔った市長が現れると、もはや作業どころではない。戦々恐々、何処へ逃げようかと、作業用の机を飛び越えたり、部屋中を右往左往することになる。これが毎夜のようにくり返される。そのつど作業は中断される。市長がようやく疲れはてて寝

入ってから作業は再開される。

作業そのものは三人三様で、それぞれで自作の詩らしきものを鉄筆で原紙に切り、謄写版でB四判のザラ紙に刷って二つ折りにし、調査をとつてホッチキスで束ねる。こうして出来たのが「カオス詩同人」名によるB五判、三四頁の詩集「カオス」創刊号である。巻頭の二三行からなる「解題」は、川満大兄自ら草して原紙を切ったものだが、末尾は「精神の混沌」というよりも／未知の詩美の可能を／内包する混沌の境地」「この貧しい詩集からどんな素晴らしい／詩の方向が切拓かれるかわからない」と記している。作品は、仲宗根、砂川、川満大兄の順で、それぞれひとくくりにした表題を付けて収録している。

仲宗根は「崖下のイマージュ」の題で、咽喉の部分から、崖下のイマージュ、たそがれの和合、八月十五日、の四点。砂川は、「路の咳き」の題で、超饒舌、抱腹して考える、路の咳き、の三点。川満大兄が「実験室」の題で、風聞、九月の家庭、危篤状態、デイゴと農夫と俺と、抵抗への姿勢、世相断面、実験室、倦怠心像、白痴教練所、の九点である。

創刊号と銘打ったということは、当然のことながら二号、三号と続刊を想定していたのだが、明けて一九五九（昭和三十四）年三月、川満大兄がコザ支局に転勤したこともあつて、自然と停刊してしまった。詩集「カオス」は良くも悪くも、タイムス宮古支局にまつわる川満大兄二六歳、砂川二三歳、仲宗根二四歳の足跡である。

その後いくつもの長編小説、ドキュメントを公刊し、引きつづき力作を期待されていた砂川は何を急ぐのか、二〇一〇（平成二二）年七月二〇日さつさと逝ってしまい、川満大兄ひとり今も個人誌「カオスの貌」等に拠り、詩作等に精進している。

（「琉球・島の宝」創刊号 二〇一四・三・二七）

2. 「密牙古」3号編集後記

▼歴教協宮古支部は一九六五年十月、わずか三人で結成された。手はじめにとりくんだのは歴教協副委員長(当時)で、学術会議会員でもある高橋碩一先生を宮古におむかえすることであった。二旬たらずで会員を倍化し、あわせて「高橋講演」に必要な資金カンパの訴え準備がすすめられた。誕生日もない歴教協宮古支部にとって、それはきわめて意義深いとりくみであった。周知のように、その年七月には宮古郡農民は郡民各層の支持のもとにねばり強いたたかいをすすめ、製糖会社の合併阻止、独占化をはばむかかってない大きなたたかいに勝利をおさめ、ひきつづき官憲の弾圧にたいして断固たるたたかいをすすめられていたときであった。最低必要とする経費三十五弗は教育労働者のみでなく、官公庁や自治体の労働者、農民、医師等からこころよくよせられ、十二月下旬、一泊二日間の日程をとどこうりなく手配できた。

▼高橋先生の「世界の動きと日本民族の解放」は、きびしいたたかいをすすめている宮古郡民の気持ちにピッタリしたものであった。活動家懇談会の席上、教育労働者の憲法第九条と自衛隊との関係をいかに教えるかとの質問にこたえて、「それは教師自身が決めることであり、教師は魂の技師として、科学的に、感動的に、生徒の心に定着させ、行動に移させていただきたい」と語ってくれた。高橋先生の講演をきいて感動しないものはなかった。講演終了後、感激もさめやらず歴教協加入を申し出る人もいたほどである。

▼あれから五年になんなんとしている。いま宮古支部には二十一人のぼる会員がいる。毎月一回の定例会を通して、地域史を人民の立場から掘り起こす作業をすすめるとともに、地域の人びととともに地域の歴史創造にいかにか参画していくか……つねづねはなしあっている。

一九六八年には危険な「明治百年」宣伝のねらいをばくろする研究・調査活動を、ついで六九年の大半は「下地島飛行場」問題に集中していった。伊良部村下地島へSSTパイロット訓練飛行場を誘致する問題は、すべて佐藤自民党政府と航空独占の必要にせまられての計画であり、いうところの地域開発さえも問題外とされているのである。

▼嘉手納や羽田空港をしのぐ大飛行場が直接米軍占領下の沖縄県で、安保体制化の日本で、軍事基地に転用されないという保障は何ひとつない。通産局長は「いったん緩急あればどんなものでも軍用にならないとはいえない」という。アメリカ帝国主義の軍事的植民地的支配下に生きる県民は、毎日毎日が「いったんかんきゆうあれば……」のなかにいる。安保の地位協定をみるまでもなく、六九年十一月、日米首脳会談で明らかにされた「核かくし返還」「核アジア安保」構想はいっそう歴教協宮古支部の指摘の正しさを証明している。戦争の要因をなすあらゆることからに勇気をもって立ち向かっていかねばならない。爆音、廃液による公害についてもいささかも軽視してはならない。

▼佐藤自民党政府と航空独占の圧力で、屋良革新「政府」は「誘致決定」をくだしたが、地元では地域ボスのしめつける困難な状況下で、なお根強い反対のたたかいが発展しつつある。地域のきわめて善意の人びとの心を土足でふみにじるようなその土地買い上げ構想は、これまでこの本質を気づかなかった人びとをさえ、憤激させている。屋良「政府」のあやまりを質し、民主勢力の統一に留意しつつ、地域の人びととともに反対闘争をいっそう強化していかねばならない。それこそ人民の歴史創造に参画する歴教協のつとめであると自認している。

▼「密牙古」第三号は、歴教協支部例会の決定にもとづいて宮古教

職員会機関紙「教育時報」等に発表した会員の下地島飛行場に関する労作を特集した。たたかいの足跡を踏まえて、さらに今後のとりくみを強めていくためにである。そのつどのものだけに、下地島問題の全貌を知る上ではいささかくいたらない感がするのは否めないが、この小冊子を手にした多くの人びとに下地島飛行場問題の入口までいざなうことができれば望外のよるこびである。

▼歴教協宮古支部の機関誌「密牙古」は、一九六六年四月に創刊号（ガリ刷り）を出している。そのご内部のさまざまな事情から休んでいたが、たびかさなる討議を通して機関紙誌活動の重要性があらためて提起され、六八年十一月の「ごまかしの明治百年」を第二号（タイプ刷り）、本号を第三号として、「密牙古」発行を定期化していくことになった。ひきつづきご指導、ごべんたつを願うものである。

▼なお、巻末の「小学校指導要領」に関する一文は、文部省に肩がわりして遠く宮古まできて開く書籍出版社の「伝達講習」に向けて会員がまいたチラシの全文である。あわせてご一読を乞うしだい。

（一九七〇・五・三）

3. 第15回平良市民総合文化祭（1974年～1983年）

1974（昭和49）年度は平良市の文化行政を語る上できわめて画期的な年である。教育委員会の事務局が2課制（総務・指導）になって文化行政の全般にわたって市長部局・企画室との密な連携のもとに取り組まれるようになった。前年度に始まった文化財保護行政を軌道にのせ、市民総合文化祭、市史編さん事業、少年少女合唱団、宮古まつり、関東・関西ふるさとまつり等もすべてこの年に始まっている。

市民総合文化祭については、日ごろ様々な分野で活動している各界・各分野の代表を招いて協議を重ねることから始めた。実行主体は

じめ、趣旨、内容、場所、時期など全般にわたって協議し、平良市の恒久事業として位置づけ練りあげた。その結果、「市民文化の向上を図り、あわせて市民協和の機会と場をつくる」趣旨のもと、メインテーマを「創造する市民の文化」とした。時期は「文化の日」を中心に設定、初年度は11月1日～4日の4日間、祖国復帰記念事業で新装間もない市民会館を中心に文化センター、婦連会館等を会場に、各種展示、舞台発表部門で催すことになった。実施主体は助役を委員長に実行委員会が組織され、各部門ごとに運営委員会が編成されて取り組んだ。

〈実行委員会〉

委員長・池村正義（助役）、副委員長・砂川禎男（教育長）・宮川政次郎（総務課長）、委員・友利定雄・砂川玄徳・松原清吉・伊良皆春宏・川満進・仲宗根将二、事務局長・根間玄幸

〈各部門運営委員〉

書 道・新城 森彦・奥平 健二・伊波 義一
 絵 画・下地 明増・本村 恵清・砂川 恵光
 写 真・比嘉 正義・池村 広光・砂川 恵貞
 民芸 品・砂川 明芳・下地 恵康・浦崎 安常
 園 芸・砂川 恵敷・立津 時男・仲本 正雄
 お茶・お花・喜納 照子・比嘉より子・平良 克子
 くらしの工夫・下地 恵順・与座 秀
 青年の主張大会・友利 吉博・大城 勇・池間キヨ子
 郷土の民話お話大会・大山 高春・下地 文・波平 恵栄
 文化講演会・砂川 恵正・友利 恵勇・砂川 玄徳

（新里恵二「沖縄の歴史」講演）

民俗芸能大会・当間 林光・古堅 宗栄・川満 恵信・仲間 克江・

池村 秀

音楽発表会・豊見山恵永・下地正次郎・佐渡山 力
鼓笛隊及びブラスバンド発表会・下地 博子・兼村 忠治・垣花 ト

ヨ

短歌・俳句・宮国 泰誠・平良 好児・伊良部恵勝

芸術劇場・伊志嶺 亮・友利 吉博・宮城 功・下地 国雄

(前進座「高野長英く水沢の一夜」・狂言・舞踊上演)

【第1回市民総合文化祭における平良重信市長あいさつ】

深まりゆく秋とともに、私たちの心に芽生えてくるものがある。

その芽生えは、次第にふくらみを増し、激しい燃焼の後に昇華し形あるものとして存在を主張する。

それが、詩であり短歌であり、絵画であり、そして、ありとあらゆる創造の所産なのである。その創造の所産は、この四日間に集中的に発表されるのである。まさに芸術の競宴ともいえるし、平良市民の燃えたぎる生命の乱舞ともいえるのではないか。

私は高い文化的水準を保ちながら、常に飛躍を求めてやまない進取の精神に徹した市民に、大きな誇りを抱いている。

全国にも類を見ない総合文化祭から生れて来るもの……それが眼に見えないものであればあるほど私には貴重に思えてならない。

願わくば、ここ平良市に永遠の芸術の灯が燃え続けんことを……。

昭和49(1974)年 文化の日

1978(昭和53)年11月、第5回市民総合文化祭が終了した時点で関係者が一堂に会して5年にわたる市民文化祭の総括がおこなわれた。さらに1983(昭和58)年11月第9回を終えて第10回を

準備する過程で2度めの全面総括が進められ、一般成人部門は行政主導から民間主導へ発展させることが最終的に確認された。こうして8回にわたる準備委員会をへて、翌84(昭和59)年1月27日平良市文化協会が設立され、市民総合文化祭一般の部は第11回以降平良市との密接な連携のもと、文化協会が責任を負って取り組まれるようになった。同年4月1日指導課は、学校教育と社会教育の2課に分離され、文化協会の事務局は一時社会教育課があずかつての出発であった。

宮古郷土史研究会

〔設立〕宮古郷土史研究会は1975年4月、県立図書館宮古分館主催「郷土史講座」の受講生を中心に設立された。当初の一年間は図書館の事業として進め、翌76年4月の総会で会則を制定、役員を選出した。「宮古の歴史、民俗、言語、宗教、社会、芸能、その他文化一般の総合的研究を行う」のが目的である。役員は、会長・宮国定徳、副会長・大山春明、運営委員・平良好児・池村恵祐・吉村玄得・平良新亮・仲宗根恵三・仲宗根将二・岡本恵昭・下地和宏、事務局長・砂川幸夫、書記・砂川美恵子、監事・座喜味盛紀、羽地 栄の諸氏。

〔活動状況〕毎月第3木曜日夜7時〜9時県立図書館宮古分館で定例研究会、隔月発行の「会報」は2005年9月現在150号、2〜3年ごとの研究誌『宮古研究』は現在10号の発行準備中。定例研究会以外には、「宮古島記事仕次」や「与世山親方宮古島規模帳」など古文書の読み合わせ、各種シンポジウムや「先島文化交流会議」など他研究団体(個人)などとの交歓・交流等々取り組んでいる。歴史教育者協議会(歴教協)、八重山文化研究会、琉球大学史学会、沖縄国際大学南島文化研究所、宮古の自然と文化を考える会、南島史学会、首里城公園友の会、奄美・沖縄民間文芸学会等と研究発表会、各種シン

ポジウム等の共催である。

また、研究会設立以来、県立図書館宮古分館と初心者対象の郷土史講座を毎年秋に共催し、市民総合文化祭では「講話（宮古の歴史と文化）と史跡めぐり」で参加している。このため「会報」や『宮古研究』のほかに、一般対象に『宮古の史跡をたずねて』『宮古の戦争と平和を歩く』等の案内書も刊行している。

これらの活動が評価されて、1991（平成3）年12月、平良市教育委員会から「文化振興」功労賞、1993年7月、柳田国男ゆかりサミット実行委員会から「柳田国男ゆかりサミット賞」、同年11月、沖縄県文化協会から「功労賞」を授与されている。

〈今後の研究会活動〉月例研究会、隔月「会報」発行、『宮古研究』発行とともに初心者対象の郷土史講座（講話「宮古の歴史と文化」と史跡めぐり）、会外研究者（団体）との交流、市民総合文化祭参加等は、毎年、定期総会で確認されているが、併せて児童生徒向けのやさしい「宮古歴史」編さん等も課題にしている。現在会員は44人。

〔付記〕2020年11月現在「会報」は241号、「宮古研究」は13号、会員は35人。

郷土史部門・初心者対象に講話「宮古の歴史と文化」と史跡めぐり

平良市文化協会は周知のように、第10回市民総合文化祭を迎える1983年3月、設立準備委員会が設置され、8回にのぼる検討を経て翌84年1月設立された。宮古郷土史研究会は趣旨に賛同して準備委員会に参加、当時副会長（現・顧問）であった平良新亮氏が準備委員長をつとめている。こうして文化協会は設立され、従来の行政主導の市民総合文化祭一般の部の重責を担うようになった。しかしこの段階までは事務局長を役員に送り、個々の会員が市民文化祭の各展示・

舞台発表の各部門に参加する程度で、組織としてはどの部門にも参画していなかった。設立準備委員長を送りだした研究会としては、当然のことながら事あるごとに気がかりな状況をかこっていた。

さいわいというか4年目の1987年11月、平良市が市制40周年記念事業の一環として、沖縄タイムス社と共催して、「人头税廃止5年記念シンポジウム」を催すに当たり、研究会にふさわしい参加について検討がなされた。その結果市民総合文化祭の日程に合わせて「人头税ゆかりの史跡めぐり」を実施することができた。以後、毎年市民文化祭に研究会として参画するようになる。

これを契機に翌88年11月の秋の市民文化祭からは初心者を対象に「宮古の歴史と文化」の講話と史跡めぐりをもって研究会の年間事業として位置づけ、毎年参加するようになった。1時間の講話のあと、大型バスに乗って宮古本島内20余か所の史跡——宮古歴史の舞台の探訪である。そのつど参加者の感想を研究会「会報」に掲載してきている。

1999年11月の第26回市民総合文化祭では、同年3月、平良市が策定した「歴史・文化ロード（平良綾道）整備計画」を受けて、初めて「平良市歴史の道を歩く」を実施した。市役所を起点に、主に北小学校区内の史跡20余か所を3時間近くの散策、参加者は50余人、盛況であった。2001年まで3年つづけ、2002年11月の第29回市民総合文化祭では、人头税廃止100年の節目の年とあって、宮古広域圏事務組合の100年記念事業に合わせて、再び趣向を変えて「人头税に関する講話と史跡めぐり」を実施した。2003年11月は「宮古の水・森・土・ひとを考えるシンポジウム」（宮古の自然と文化を考える会と共催）を市民文化祭に位置づけ、2004年11月は再び宮古の歴史と文化をたずねて「講話と史跡めぐり」を実施、さ

らに宮古5市町村の合併で、平良市文化協会最後の市民総合文化祭となる2005年5月は、戦後60年を踏まえて宮古本島一円にわたる「戦後60年・講話―宮古の戦争と平和―と戦跡めぐり」を実施した。この参加者の感想も「会報」に掲載させてもらった。以上が平良市文化協会とともに歩んできた宮古郷土史研究会活動のあらましである。

「平良市文化協会20余年〈資料集〉」編集を終えて

2005年4月の定期総会で急拠編集・発行の決定をみた『平良市文化協会20余年〈資料集〉』、ようやくお届けすることができました。

平良市文化協会は1984(昭和59)年1月、平良市・同教育委員会の指導で設立されました。当時県内53市町村のなかで、沖縄市、浦添市につぐ3番めの誕生です。以来20余年、市民総合文化祭はじめ、宮古全般の各種文化事業に多様なかたちで参画してきました。

1994年1月、平良市の全面的な協力で設立10周年記念事業を催し、さらに2003年、翌年1月の20周年に向けて日々の事業に並行して準備を進めていた同年9月、周知の74メートル余の大型台風に見舞われ、宮古全域大災害。30年の歴史をもつ市民総合文化祭(展示部門)も会場難で中止の止むなきに至りました。「20年記念誌」も財政の見通しなく、他の記念事業とともに取り止めです。

ついで全国的な市町村合併の大嵐。宮古も紆余曲折の末、5市町村合併で発展的(?)とはいえ平良市がなくなりません。いきおい平良市文化協会も……。ここへきてせめて設立以来の歩みを『平良市文化協会20余年〈資料集〉』としてまとめておきたい、2005年4月定期総会での確認です。広報委員会が担当、4〜5月には会報「標」25号編集の傍ら論議を始め、8月から企画編集を本格化しました。主として次のように分担し、事あるごとに議論しつつ、運営委員会に報告し

てのまとめです。

- 第1部…平良市文化協会20余年のあゆみ 仲宗根將二
 - 第2部…平良市民総合文化祭(一般の部) 与儀 一夫
 - 第3部…平良市文化協会加盟サークル紹介 与那嶺達男
 - 第4部…歴代三役の回想、〈資料編〉…事務局 平良是守・平良恵子
- 必ずしも十分とは言えませんが、平良市文化協会設立以来20余年のあゆみはほぼ概観できることでしょう。併せて新市文化行政の参考資料にもなれば幸いです。なお、平良市文化協会に関わる地元二社―『宮古新報』『宮古毎日新聞』―の記事も活用させてもらいました。記して感謝の意を表する次第です。

(平良市文化協会20余年〈資料集〉)二〇〇五・一二・二五)

4. 「平良市文化協会」の出会いと別れ

三月三十日、平良市文化協会が二十二年余の歴史の幕をとり、解散した。その設立に関わったもの一人として、感慨ひとしおの思いである。平良市文化協会は一九八四(昭和五十九)年一月、市当局の肝入りで設立された。県内では、当時五十三市町村中、沖縄・浦添両市に次ぐ三番めの文化協会である。

一九七四(昭和四十九)年度は、平良市の文化行政を語る上で特筆すべき年度であった、と考えている。このことは平良市の職員として在職中はもとより、退職後も機会あるごとに話題にしてきた。一九三一年に始まった「十五年戦争」の終焉しゅうえんともいえるべき「沖縄戦」に引きつづく二十七年という米軍全面占領支配を脱却した「祖国復帰」直後ということもあつたらう。県外大資本の土地の大量買い占め、自然破壊をともなう大型公共工事は一応おくとして、いわゆるソフト面をみておきたい。

一九七四年一月、助役に転じた池村正義氏に代って、教育長に故砂川禎男先生が平良第一小学校長を退職して就任された。四月一日付で教育委員会事務局に課制が導入され、総務・指導二課が誕生、指導主事二人が配置された。その後の文化行政の大方は市長部局の企画室と指導課との連携のもとに、全庁挙げて取り込まれた。前年度発足した文化財保護行政を軌道にのせ、市民総合文化祭、「平良市史」編さん事業、青少年合唱団、宮古まつり（商工観光課担当）、さらには関東・関西の「ふるさと祭り」もこの年に始まっている。

初の市民総合文化祭に向けて、委員長・助役、副委員長・教育長らで実行委員会を発足させ、各界・各分野で活躍する代表、有志を招いて協議が重ねられた。こうして「市民文化の向上を図り、あわせて市民協和の機会と場をつくる」趣旨のもと、「創造する市民の文化」を主題に各分野ごとに運営委員会を構成、第一回平良市民総合文化祭が開催された。展示部門は、書道、美術、写真、文芸、民芸品、園芸、お茶・お花、くらしの工夫、の八つ。舞台発表等は、青年の主張、民話お話、音楽、民俗芸能、鼓笛隊及びブラスバンド、文化講演、芸術劇場の七部門。「文化の日」をはさんで十一月一〜四日までの四日間開催された。

一九七八年十一月、第五回を終えた時点で、各分野の運営委員並びに各サークル代表の合同会議が開かれ、総括が行われた。さらに八二年十一月第九回を終えた翌八三年三月三十一日二回めの総括がなされた。席上、市民総合文化祭を行政主導から民間主導へと発展させることが確認された。その受け皿として文化協会を設立することになり、六人の準備委員が選任された。当時宮古郷土史研究会の副会長であった故平良新亮はじめ、亀浜文、友利吉博、友利敏子、伊志嶺敏子、長浜隆ら六氏、事務局は企画室文化広報係の担当である。四月二十一日

初の設立準備会が開かれ、準備委員長に平良新亮さんが互選された。以来、各自サークル行事を抱えつつ、第十回市民総合文化祭に取り組む過程で準備会は八回開かれ、翌八四年一月二十七日、「平良市文化協会」は設立されたのである。

設立総会は、平良市文化センター・大ホール（現市立図書館二階）で開かれた。根間玄幸氏（故人）の司会で、開会宣言（亀浜文）、座長に砂川明芳氏を選出して、準備委員会代表あいさつ（平良新亮）、経過報告（事務局）とつづき、設立趣意書・会則案等が提案され、質疑・討論をへて決定、ついで役員が選出された。会長に伊志嶺亮、副会長は松原清吉・伊志嶺敏子、事務局長に友利敏子、運営委員十人は、平良新亮・城間啓子・宮国泰光・亀浜文・友利吉博・久貝勝盛・中村逸子・佐渡山安公・長浜隆・古堅宗和、監査委員二人は野原健・小椋恵良ら、以上の各氏による出発である。顧問として、宮国定徳・平良好児・宮国泰誠（以上故人）・下地明増ら四氏が推戴されている。

さつそく同年十一月の第十一回市民総合文化祭一般の部は文化協会の担当で始まった。八八年第十五回からは季節を反映して春・秋二回、九四年には設立十周年を記念して宮古方言の復権を企図し、宮古方言弁論大会も始めている。その他関連する様々な催しや文化施設の建設など、必要な提言も手がけてきた。これら活動の成果は、八周年記念誌『標』、十周年記念誌『ひらの文化』、さらには昨年末刊行された『平良市文化協会20余年〈資料集〉』にその大方が収録されている。五市町村合併にともなう新市の文化行政にとつてもよき参考資料となることであろう。（『宮古毎日新聞』二〇〇六・四・一五）

5. 黒崎義介画伯の「平和観音像」

「会報」一〇七号で紹介した前藤沢市文書館長で、「全史料協」副

会長の高野修氏は、文書館運動で広く知られるほどに、多くの文書館関係の著書・論文を出しているが、それ以外にも少なくない著書をもっている。そのうちの一つに『黒崎義介・絵と生涯』童画と共に六十年』がある。一九八八年十月、「よし介福祉基金」から新書判で発行されている。それによると、黒崎画伯―ひいては高野氏は、今回の宮古訪問にさきだつことほぼ二十年も前から宮古にかかわっているのがわかる。宮古の戦跡―東平安名崎近くの「平和観音像」に直接かかわりがあるので、関係箇所を抜粋、紹介しておきたい。

製作者の黒崎義介は明治三十八(一九〇五)年三月二十五日、長崎県平戸の醤油醸造業の旧家に生まれた。中学四年のとき、兄の友人で京都大学教授から河上肇の『資本論』を借りて読んだことが問題になって退学させられた。のち上京、川端玉章の設立した川端画学校日本画部に通う。教授陣の多くは東京美術学校(現東京芸大)の教授らで、黒崎は幼少時から画才にすぐれ、わずか八か月で同校を卒業している。―童画と共に六十年、というほどに生涯の大半を童画の世界に生き、一九八四(昭和五十九)年八月十二日、七十九歳で死去している。「平和観音像」は晩年の制作である。

高野著『黒崎義介・絵と生涯』に描かれた宮古にかかわるくだりは二か所あって、たがいに関連している。一つは冒頭の「生い立ち」で次のように記されている。

「黒崎義介画伯は小林古径に私淑した時期がある。そのため初期には「草径」と号していたほどであった。何故に画伯が古径を求めたのかというと、やはり古径の「線の芸術」に強くひかれたからではないかと私は思っている。私は画伯の晩年の作品となった「宮古島平和観音像」制作中の画伯から、この線は今になってもなかなか引けないもんだということを知ったことがある。その時、さらに画

伯は「日本画は描線の芸術だといわれているが、たしかに古径には、定規でも引いたような無表情にみえる線があるが、どうして、無表情な線が引こうとしているようにも思われるほど描線が重視されているんだよ」と話されたことを記憶している」

ここでは黒崎画伯が「線の芸術」を追求した小林古径の影響をうけており、画伯晩年の作「宮古島平和観音像」も、その影響をうけた作品だと指摘しているのであろう。二つめは巻末近く「藤沢を愛して」に次のように記されている。

「昭和五十四年一月宮古島に平和観音像を、戦友が眠る丘に建立したいという県映画協会理事の武部一良さんの頼みに、画伯は一月かけて「やさしいお母さん観音」の原図を完成させ、同年夏には銅板に刻み込まれて、今、夕日が美しい宮古島の岩にはめ込まれた。原図はその後、著者に画伯から贈られ、遊行寺宝物館に納められた。」

一九七九〇年当時の『宮古新報』等地元紙の伝えるところによると、「平和観音像」は第二次世界大戦中宮古に展開した第二十八師団の通信隊員であった神奈川県茅ヶ崎市の武部一良氏らが、地元城辺町の協力を得て建立している。一九七九年八月、東平安名崎のつけ根の見張らしのいい所に着工したが、相づく台風の接近で工事は難航したため地元に一任、地元の手で竣工をみた。翌一九八〇年五月になって、武部氏ほか茅ヶ崎市の衛生課長、福祉事務所長、市議会議員らが訪れて、「碑文」を碑左横面にはめこみ、さらに同年十一月二十三日改めて除幕式をかねた慰霊祭が挙行されている。武部氏ら隊友会十五人、宮古市町村会、城辺町役場など関係者多数が参列、神奈川県知事並びに茅ヶ崎市長のメッセージも披露されたもようである。「平和観

画像」左上には大きく二行、「幾多の英霊この島に眠る」「昭和五十四年八月十五日 水越茅村拜書」と刻されている。

なお、当時「碑文」については「武部一良撰、見上保護書」などと報道されているが、「平和観音像」そのものの制作者については報じていないようである。「平和観音像」右下には、「黒崎義介」の名が刻されているのに、どうしたことであろう。

(「宮古郷土史研究会会報」一〇八号、一九九八・七・十一)

6. 第24回「全史料協」全国大会

十一月十一日から十三日までの三日間、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会(全史料協)の全国大会が「地域史料の充実をめざして―史料の保存と記録の創造」をテーマに、那覇市で開かれる。全国大会が県内で開かれるのは十年ぶりである。

全史料協は一九七六年設立。今年で二十二年になる。その間、全国大会には二回しか出席していないが、県内で再度開かれることを喜ぶ者の一人として、大会討議に期待を寄せる立場から、過去二回の大会模様について少々触れたい。一回目は一九七六年二月山口市での設立総会、二回目は一九八八年十月の沖縄大会である。

那覇市史編纂室(へんさん)の外間政彰室長(故人)から、県内すべての市町村史担当者が出席しそうな呼び掛けがあり、山口県公文書館での設立総会に出て驚いたのは、沖縄県からの参加者が三人だったことである。他の二人は史料編集所の大城立裕所長、那覇市史の大城康洋氏(故人)。後日、会員名簿が送付されてきて再度驚いた。県内の機関会員は沖縄史料編集所と平良市史編集室の二つ。個人会員は三人で、他の二人は那覇市史の大城、城間宗敏両氏である。

設立総会では、会則審議で長い名称が焦点になったが、原案どおり

決まった。また、「歴史資料」とは、「行政資料を含む文書記録」であり、「考古資料は含まない」とされた。役員も原案どおり決まった。会長は茨城県歴史館長の岩上二郎氏(故人)、氏はのちに参院議員選に出馬、議員立法で「公文書館法」成立に尽力している。副会長は山口県と埼玉県、理事九人のなかに史料編集所の金城功氏も選任された。研究討議は、行政文書の収集と整理における藤沢文書館の問題点、公文書の収集と公開について(北海道)、山口県内市町村行政資料の調査、以上の三つの報告を中心に進められた。内容もさることながら、取り組む姿勢に感銘した。

第十四回全国大会が八八年十月、初めて県内開催となった。前年十二月、初代会長岩上二郎参院議員の努力で「公文書館法」が成立して初の全国大会である。研究テーマも一年近く小委員会を検討した「公文書館法の意義と課題」であった。全国から那覇市与儀の県立図書館に百三十九人が参加して開かれたが、台風24号のあおりで、一日目は午後一時すぎで打ち切りという予期しない事態に見舞われた。それでも金城功氏の報告「琉球政府文書の特徴と整理保存の現状」は、二十七万点にもものぼる資料群とともに参加者に大きな感銘を与えたようだ。

また、この大会がその後の沖縄県公文書館設立促進の推進力になったと伝えられている。七九年八月、沖縄県は文書館をも含む「沖縄県総合文化センターの設立」について答申を受けていたが、停滞状況をかこっていた。全国大会の翌八九年調査費、九〇年開設準備費、九一年には建設は一気に加速された。九二年三月、沖縄県公文書館基本構想が提出され、九四年一月着工、九五年八月開館へと進んだ。

その間、九四年十月には有志による「沖縄県公文書館(仮称)の可能性を探る」シンポジウムがタイムスホールで開かれ、内外の関心を

一層高めた。参加者からも多くの質疑と意見が述べられた。私も司会の指名で、「開館後の県公文書館がひとしく県民に公開されるのは当然のこととして、さらに市町村における文書館設立を促し、そのネットワーク化を図るつとめもあるう」旨の発言をした。

今回の二十四回大会は、大会テーマに基づく三つの分科会、「文書館の役割」など六つのテーマによる研究会、「公文書館の普及活動と展示」など自由テーマによる二つの分科会、全体会、視察など、多彩な内容で開かれる。県民の知る権利にこたえる上で、文書館と情報公開条例は不可分にかかわっている。大会が県はもとより、市町村段階への大きな刺激になることを期待している。

〔琉球新報〕一九九八・一一・一〇〕

7. 「忠導氏仲宗根家資料展」

十一月一日から「忠導氏仲宗根家資料展」が平良市総合博物館で開催されている。宮古の歴史や文化に関心を寄せるものにとつて、好機逸すべからずの思いをそそる企画展である。既に地元紙等で紹介されているが、かつて同家資料の調査に多少とも関わったもののひとりとして、その見どころのような点について、いくらかでも記すことで参観の一助にもなればと考えている。

忠導氏とは、近世琉球において身分制が定められたとき、仲宗根豊見親の子孫を名乗る人びとが称した「氏」である。十四世紀末、初めて沖縄本島の中山（王権）に朝貢した与那覇勢頭豊見親トウユキヤの後裔である白川氏（名乗り頭「恵」）とともに、宮古の二大名家として首里王府から処遇された家柄である。

仲宗根豊見親は周知のように、一五〇〇（弘治十三年、八重山の「オヤケアカハチラの事件」にさいして、首里王府が三〇〇〇の兵を

さし向けたとき、一族郎党を率いて先導役をつとめた、当時の宮古の統治者である。一五二二（嘉靖元）年には、宝刀「治金丸ちがね」と天女のさざかりものと伝えられる宝珠「夜光の玉」を尚真王に献上すること、宮古・八重山の権力委譲をはかっている。

童名は「空広」だが、身分制が定められ、「家譜」が整備されたとき、諡いみな一名乗りを「玄雅」とおくられている。以来忠導氏は代々その名乗り頭に「玄」の字を付してきている。東仲宗根外間ぶかまの仲宗根家はその正統を名乗る家柄である。十八代の当主玄吉医博は大分県で仲宗根病院を経営、法医学の権威としても知られている。留守宅に置かれていた多くの文書・物品類は故中野トミエさん（十七代玄広実妹・玄吉氏叔母）が管理し、現在は博物館並びに祥雲寺に寄託（贈）されている。

博物館受付けで入館者に配布される「資料目録」によれば、平良市指定文化財三三点をはじめ、「文書類」八〇点、「物品類」四六点が展示されている。そのほとんどは十八世紀以降とみなされるが、なかには十六世紀初頭、仲宗根豊見親、同夫人宇津免嘉うつめがが尚真王にもらった二つの金頭銀茎の簪かんざしもある。獅子と鳳凰である。当時の中国の序列では、「獅子は武官の最高位」、「鳳凰は王者の象徴」である（池宮正治「仲宗根豊見親家の金簪」）。

「忠導氏正統家譜」には「玄雅、金頭銀茎有獅子之鑄形、婦人宇津免嘉、金頭銀茎有鳳凰之鑄形」とある。もつとも二つの簪は、いつのことであろうか、火災にあってひとつにくつついている。これも同家の波乱の歴史を示すものとして眺めればまたそれなりの興味もわいてこよう。

見どころの二つめに、宮古に唯一最大と思われる大型の唐位牌がある。仲宗根豊見親夫妻を中央頂点におき、右へ八世九人の歴代当主、

左へ同夫人の、戒名、官名、字が左右対に並記されている。裏面の碑文は祥雲寺住職・得髓が康熙五十四（一七一五）年春、と明記、九世玄邑によって「立大位牌諱奉祭祀」されている。乾隆二十二（一七五七）年整備の「家譜」の表記と微妙な相違がいくつかみられるのも興味をひく。

三つめには、多くの扁額があげられよう。常設展示室でみられる「太平山」は尚穆王（しょうぼく）のとき、中国（清）皇帝の使節として来琉した冊封正使・全魁の、「忠導堂」は同副使・周煌の、「世捧貢」は同随行のひとり古愚杜松の筆である。いずれも乾隆二十一（一七五六）年、公用で上国したであろう砂川親雲上玄勝（さくらか）が書いてもらったことが明記されている。周煌は帰任後、「琉球国史略」全十六巻を著わしている。風まかせで長期滞在を余儀なくさせられたであろう宮古の役人たちは、このように首里滞在中、高位高官、あるいは文人墨客らとまじわって学を修め、教養を高めていったであろうことをうかがわせている。これらのほか、「家譜」や「辞令書」等の原本、「宮古島記事仕次」等の旧記類、宮古ではめずらしい家紋入りの調度品等もみることができ。勝手を言わせてもらえれば、今は那覇市蔵になっている「治金丸」も、いつか展示してほしいものである。企画展は三十日まで、未だの方はぜひご参観を！（「宮古毎日新聞」二〇〇三・一一・二四）

8. 人形劇団「かじまやあ」公演

人形劇団「かじまやあ」（桑江純子代表）が、十月十五日マティダ市民劇場で公演する。八年ぶりの宮古公演である。今回の演目は、劇団創立三十年を記念して昨年十二月、国立劇場おきなわで初演した「チョンダラー（京太郎）」。人形劇といえば即子供向けの…と思いがちだが、これは幼児から成人まで十分に楽しめる人形芝居として定評

のようである。

「チョンダラー」とは、薩摩支配以前から琉球に京都から来た太郎の意で、明治初期頃まで首里のアンニヤ村を拠点に、人形を使って数々の芸を演じた芸人およびその芸能のことである。十七・八世紀頃一般社会に浸透、法事や家の新築・出産等の祝事に招かれ、歌や踊り、仏の人形を操って「三年の厄難を払う」というので、民衆に親しまれてきたという（島尻勝太郎『近世沖繩の社会と宗教』一九八〇年）。組踊りや各地の「口説」、エイサーにも反映しているという。現在、沖繩市泡瀬と宜野座村宜野座に伝承されている「京太郎」は、いずれも県の無形民俗文化財に指定されている。

一九七四年二月、人形劇団かじまやあを設立した桑江さんは、その後十年「キジムナーの笛」など、沖繩の民話・伝承を題材にした作品で県内はもとより、九州各県で公演している。さらに、一九八四年三月には、心機一転、台湾の伝統人形劇「布袋戯」の伝承者、鐘任壁（人間国宝）に弟子入りして、一日に十二時間、八カ月にわたって修行を積み、日本人として初めて「免許皆伝」になったという。沖繩の民話・伝承に、台湾の磨きぬかれた業が加味しての新しい沖繩の人形劇の誕生といえよう。

昨年十二月、国立劇場おきなわでの「チョンダラー」を鑑賞した池宮正治琉球大学教授は「師譲りの手練の業はますます磨きがかけられ、前から後ろ、後ろから前に人形が宙を飛んで手に納まる度に客席から歓声があがり」「人形たちの卓越した技に、大人も子供も感嘆、小劇場の満員の観客を魅了した」と記している。作家の大城立裕氏も「まるでサーカスだ。子供も大人も素直に喜ぶ。随所で『ここで拍手が出そうなのだが』と思わせるうち、終幕に近く竜が客席を練り歩いて昇天するくだりではさすがに満場の拍手だ」（沖繩タイムス）と賞賛し

ている。

あらすじの紹介は観てのお楽しみということで控え、十五日の開演を共に期待する者の一人である。

〔宮古毎日新聞〕二〇〇五・一〇・一三

9. 県公文書館「宮古移動展」

南風原町新川在の沖縄県公文書館の三回目の宮古移動展が二十日から三十日まで、宮古島市総合博物館で催されている。今回は、明治初期から、戦前・戦中・戦後に至る写真資料百五十七点、文書資料百二十四点、映像資料十一点、計二百九十一点が、企画展室の全面とロビーを使って公開されている。宮古の過去と現在を、人と景観等の変遷を通して、見る人それぞれの立場から、宮古の将来を想定させるかのような密度濃い展示である。

公文書館は、今回の移動展について「戦争で荒廃した宮古の復興に尽力された先輩方の業績に思いをはせるとともに、記録を保存することの大切さを再認識していただき、宮古の歴史を振り返り、現在そして未来を考える場」にしてほしいと、慶世村恒任・ネフスキーについても紹介し、一人でも多くの参観をよびかけている。

戦前の写真では、明治・大正期の漲水港や寄留商人によって発展してきた西里通り、赤瓦葺きの古いたたずまいをみせる観音堂はじめ、昭和十年代、数度にわたって南西諸島の民俗調査に当たった社会学者・河村只雄の写した人や多良間のスツプナカ、大神島、博愛記念碑、ぶばかり石など。また、小林純技師が燐鉱石の調査の傍ら写した保良、平安名崎、狩俣の石門、池間の鯉節工場、漲水港、沖合碇泊の汽船、漲水御嶽、下里市場、石灰焼窯、シートローヤー、前山の「大波碑」、多良間の八重山遠見など、現況とはまるで違った周辺景観との

関連で見ることが出来る。戦後では、米軍統治下を現わす高等弁務官や、その代行機関とみなされた「琉球政府」の歴代行政主席、あるいは佐藤首相ら日本政府高官らの宮古視察、それを迎える児童生徒を含む多くの人がとが写っている。

文書資料では、明治期の「上杉県令宮古巡回日誌」、「宮古島々費軽減及島政改革（人頭税廃止）請願書」、「明治三十五年統計書」等に始まって、土地整理紀要、糖業要覧、日独交通資料、「久松五勇士」、戦後の宮古郡郡会議録、宮古群島条例関係綴など、宮古の近・現代を通観できるよう配慮されている。

県の公文書館は「琉球政府」文書はじめ、県公文書はもとより、日米両国立公文書館や中国の档案馆（とうあんかん）等の所蔵する琉球・沖縄関係資料も収集して、一九九五年八月に開館している。都道府県立では国内二十四番めの文書館である。他県とは異なる沖縄県の歴史の展開を反映して、国内で最も地域性豊かな文書館として知られている。

宮古移動展の一回目は、一九九九（平成十一）年十一月、沖縄県の「海外移民百年」を記念して催した企画展に、宮古関係資料を加えての展示であった。戦後の米軍統治下、『琉球の歴史』を著わしたジョージ・H・カー博士が一九六〇〜六一年に撮影した写真を中心にしての展示である。ほぼ四十年ぶりの公開とあって、写っていた少年少女が成人していて特定されたり、さらにもはやこの世には存在しないのではないかと思われていた「宮古群島政府」の有印辞令書を所持する三島貞男氏が名乗りでるなど、当時多くの話題をさらったものである。

移動展二回目は、二〇〇二年六月、「日本復帰三十周年記念特別展」で、「資料に見る沖縄の歴史」と題して公開されている。このときは著書『南方文化の探求』で宮古を紹介した河村只雄の「昭和十一年十

一月」と「昭和十三年五月七月」の日記が公開されて話題をよんだものである。昭和十一（一九三六）年十一月はちょうど「博愛記念碑」建立六十周年記念行事の真最中とあって、そのもようも明記され、さらに大神島では現在の『宮古毎日新聞』の中興の祖ともいべき山内朝保夫妻が「代用教員」をしていて、その案内を受けたことも明記されていて話題になった。

さて、今回三回目ほどのような話題が生まれているのであろうか。人は感銘を受けた文章、書物に出会うと座右に置き、再読、三読…もすると言われている。感銘深い展示会に接すれば、二度、三度…と足を運ぶのも厭（いと）わないであろう。未だの方はぜひ足をお運びいただき、宮古の将来につなぐ話題の仲間に加わってほしいものである。

〔宮古新報〕二〇〇七・一一・二八

10. 「南島研」30年の「学恩」

(1) 資料も情報も人から

1978年4月、「琉球弧を対象とする学問研究の総合化をめざして」(宮城栄昌) 発足した南島文化研究所から、学外の特別研究員に委嘱されたのは翌79年4月である。歳月は人を待たずとはよく言ったもので、またたく間に過ぎた30年の感ひとしおである。

南島研としては、研究活動ひいてはその研究成果を南島研に反映させることを期待しての委嘱であろうが、さほどの貢献もしないどころか、逆に南島研から物心両面多大な恩恵を受けている。あるいは何処も同様かも知れないが、大学や研究機関と異なり、自治体の修史事業や文化財行政等は、己の調査、研究を深めることもさることながら、往々にして他の研究者の様々な成果を活用させてもらっての事業の進展と思えるからである。

とりわけ宮古のように大学も研究機関もない離島地域では特にその感が強い。まして琉球弧の基層文化が季節風や海流によって大きく左右される時代から形成されていることを考えれば、島の外、琉球弧の外にまで視野が広がっていくのは自然の帰結といえよう。今や南島研の調査・研究活動は、奄美以南、宮古・八重山の島々に依拠しつつも、県外はもとより、中国、朝鮮半島、東南アジアの諸地域にまで広がっている。それらの成果は毎年定期、不定期に刊行される「所報」はじめ、「地域シリーズ」や「南島文化」等によって公表され、それぞれの分野に貢献し、活用されている。

1974年夏に始まった旧平良市の修史事業は、沖縄県史料編集所や那覇市史編集室（いずれも当時）、琉球大学図書館等にくわえて、南島研にはお世話になりっぱなしである。たんに史資料の提供というばかりでなく、宮古研究に関わるあらゆる情報の提供である。時として何でもないような小耳にはさむていどの小さな話題が、のちに大きな情報、資料の入手につながったりしたものである。

さらに南島研に限って言えば、2005年10月、合併前の宮古6市町村のうち、伊良部村(町)、下地町、多良間村、平良市と、4市町村を10余年、各面にわたって集中的に調査、研究に当たっている。この間、延べ70人の研究者が、地元と交流しつつ70本の論文を発表している。地域に根ざす大学の研究機関としては、当然の調査・研究活動であろうが、ひところの研究者のなかには、地元の有名無名多くの人びとの協力で調査し、資料も提供されながら、帰任後は何の音沙汰もないという事例を想起すればまさに隔世の感である。

南島研の調査団の一員としても多くの貴重な体験をさせてもらっている。多良間島では、大変貴重な祭祀を見学させてもらったのに、飲みなれない「おみき」でもどしたり下したり…。小舟で波しぶき

を浴びつつ、船酔いに苦しみながら水納島に渡ったこともある。未だ大橋の架からないころの来間島では、旅館どころか民宿もなく、公民館や自治会長さんの住宅に分宿させてもらい、弁当は平良の食堂から取り寄せてもらうなど、同じ宮古のなかでも様々な人びとの暮らしと歴史のあることをじかに学ばせてもらった。さらに八重山の石垣島、竹富島、西表島、小浜島の調査にも同行させてもらい、貴重な体験をさせてもらっている。

ともあれ南島研の特別研究員に委嘱されたことよって、当時公務であった平良市史編さん事業等がいつそう容易になったことに何よりも感謝したい。くわえて県内外の多くの研究者と面識を得たことであろう。人こそ財産とはよく言ったものである。人を知ることによって思いがけず多くの様々な資料や情報を入手でき、公私ともに大きな成果を得ている。公務を去って十数年になんなんとする今もつづいており、有り難いことだと学恩に感謝する日々である。

(2) 宮古調査十余年の蓄積

南島研は1978年設立初年度において、設立趣旨にもとづく研究方針として、「特定地域の調査研究」と「沖縄復帰の総合的研究」の2本の柱を立てている(「地域シリーズ」1 序文・宮城栄昌 1980)。この基本方針にもとづいて、地域の総合的調査研究は、初年度の第一次は「与論・国頭」、第二次「沖永良部島」、第三次「波照間島」とつづき、第四次にきて、1981〜82年度宮古の「伊良部島」を調査し、翌83年3月「報告書」を発行している。

このあと、「伊平屋・伊是名」、「徳之島」、「瀬戸内町」をへて、1989〜91年度「下地町」、1992〜94年度「多良間島」、1995〜98年度「平良市」と連続10年集中して宮古を調査し、そのつど当該地域での調査報告会を開催するとともに「報告書」をそれぞれ

4冊発行している。宮古の総合的な知的財産の蓄積と言っても過言ではなからう。研究テーマと報告者は次のとおりである。記して感謝申し上げる次第である。

伊良部島調査報告Ⅱ序文―福里盛雄、伊良部島とその地理的概観―堂前亮平、佐良浜漁家の農業―来間泰男、伊良部島の家族―玉城隆雄、伊良部島における子のしつけに関する調査研究―福里盛雄、カムス―伊良部島の年中行事―畠山篤、伊良部島の動物と植生―宮城邦治、伊良部島くまぼろしする島の生活―宮城辰男、伊良部島の島名―野原三義、伊良部島住民の日常生活行動からみた島内村落間および島外との結びつき―堂前亮平、調査概要―まとめにかえて―玉城隆雄(1983)

下地町調査報告1Ⅱ人口現象からみた下地町の地域性―堂前亮平、宮古来間島の竈神信仰―窪徳忠、来間方言の助詞(1)―野原三義、資料紹介・トライアスロン宮古島大会の舞台裏・スポーツイベント全日本トライアスロン宮古島大会―長浜幸男・解説山田等、史料紹介・栄河氏系図家譜正統・軍事扶助生業援護領収書綴(昭和18年4月以降)解説―仲宗根将二(1990)

下地町2Ⅱ来間方言の助詞(2)―野原三義、近代来間の公教育のあゆみ―下地・来間両小沿革誌を中心に―仲宗根将二、来間島の小・中学生における自然イメージ―浦田義和、資料紹介・宮古島の社会と風俗―1917〜1950年の地元新聞の記事を中心に―解説・仲地哲夫(1991)

下地町3Ⅱ宮古郡下地町の竈神信仰―窪徳忠、下地町方言助詞の研究 付、与那覇方言動物・植物語彙等―野原三義、Miyako Holiday―explorations of meaning―比嘉輝幸、下地町の歌謡―川満部落の神歌と願い―新里幸昭、来間島における部落有地の利用とその開発をめぐる法的紛争―徳永賢治(1992)

下地町4 || 昭和初期宮古の公教育に現れた国家主義的風潮について(学校沿革誌を中心に)―仲宗根将二、宮古史雑感「海上の道」検証を考える―喜久川宏、来間島における生活と出稼ぎ―仲地哲夫、史料紹介・近世来間村の史料について解説―仲宗根将二(1992)

多良間島調査報告1 || 多良間島とその地理的概観―小川護、多良間村水納の昔歌―杉本信夫、多良間方言の動詞の問題点―高橋俊三、多良間方言の語彙(中間報告)―高橋俊三(1993)

多良間島2 || 多良間島のかまど神信仰―窪徳忠、多良間の系持(土族)形成について(上)―仲宗根将二、多良間島のスツウプナカのニリ―杉本信夫、多良間方言の語彙(中間報告2)―高橋俊三(1994)

多良間島3 || 多良間島のかまど神信仰(続)―窪徳忠、多良間島の社会構造と人口・人口移動―波平勇夫、多良間方言の語彙(中間報告3)―高橋俊三、多良間島の唱えもの―新里幸昭、TARAMA-MINNAREPORT William Randall、多良間島のその他の古謡―土原豊見親ぬニリ、鍛冶神ぬニリ、雨乞いぬニリ、あだんやーぬあず、あがりすずでーり―杉本信夫(1995)

多良間島4 || 多良間島のムラと字有地―波平勇夫、多良間村のわらべうたを用いた郷土教材カリキュラム―杉本信夫、シンポジウム「多良間島の現状と課題―島の活性化を考える」報告・へき地教育の課題と展望―新城吉久、島の活性化を考える―多良間朝時、多良間島農業の課題と展望―来間泰男、島の人口問題を考える―波平勇夫(1995)

平良市調査報告1 || 宮古・平良市とその地理的概況―崎浜靖、平良市狩俣方言の助詞(1)―野原三義、宮古島西原のユークイ歌謡について―上原孝三、資料紹介・宮古群島経済自立計画書―仲宗根将二(1

996)

平良市2 || 地割制度と人頭税制度―来間泰男、沖縄の土地整理事業ノート―宮古を中心に(1)―春日文雄、宮古郡上野村のかまど神信仰―窪徳忠、平良市狩俣方言の助詞(2)―野原三義、「大母ウーシマヌトウヌヌの年の願バシい」の儀礼と歌謡―上原孝三、資料紹介・平良市経済振興五ヶ年計画書―来間泰男

平良市3 || 沖縄の土地整理事業ノート―宮古を中心に―春日文雄、宮古島のかまど神信仰―上野村と平良市を中心に―窪徳忠、宮古史雑感(2)―喜久川宏、宮古島狩俣のウプイビムヌの神歌―新里幸昭、平良市人口移動の空間パターン―中心地形成との関連において―崎浜靖、本村家「報本」碑・法事関係史料紹介―平良勝保、資料紹介・沖縄民政府総務部調査局「宮古島概況」―仲宗根将二(1998)

平良市4 || 平良市の経済と農業の統計分析―来間泰男、平良市の財政分析―渡辺精一、宮古島西原の公民館における歌謡―ブンミヤ―ヤシキダミの儀礼より―上原孝三(1999)。

(「南島文化研究所30年のあゆみ」二〇一〇・三・三一)

11・収穫多し「沖地協」との出会い

(1) あれから三十年

早いものである。沖縄県地域史協議会(沖地協)が設立されて、二〇〇九年十一月で三十年になったという。ついこの間のような気もするのだが、如何せん、加齢とともに歳月の速さと記憶力の減退を一層実感させられる日々である。いつであったか公務出張ついでに宮古の教育資料を探索していた金城善氏(糸満)と、「沖地協」設立当時のことが話題になったことがある。設立総会の会場は与儀公園の近くの那覇だか南部だかの「教育事務所であったかな?」と口にしたところ、

さすが若さのせいばかりでもなかるうが、即座に「それは違う。沖教組那覇支部の教育会館でしたよ」と訂正させられた。別の日、田名真之氏(那覇)からも同様の指摘があった。記憶力の減退は、歳月の速さに比例するようである。

ともあれこの三十年、「沖地協」とそこに結集する皆さんからは宮古の修史事業はもとより各方面にわたって多くの恩恵をこうむっている。

(2) 「沖地協」設立に参加

手もとの記録によると、「沖地協」の設立総会は、いまは亡き大城康洋氏(那覇)の司会で始まっている。歓迎のあいさつ、祝辞・祝電披露につづいて、出席した各機関の担当者による報告がなされた。北は名護から、南は石垣まで二十市町村史、沖縄史料編集所(当時)、沖縄戦を考える会、それに琉球大学や沖縄国際大学にあって市町村史に関わる面々から、それぞれの所属する機関の進捗状況、あるいは準備状況等の報告であった。どの機関もきわめて意欲的で、大いに励まされたものである。首長・教育長・総務担当課長らも出席して、積極的に発言しておられたせいであろうか。平良市からは教育長も出席された。

基調講演では、沖縄国際大学の仲地哲夫助教授(当時)が「沖縄における地域史の課題」と題しておこなった。「自治体史編纂の課題」に依拠しつつの講演とこのようであったが、非科学性とディレクタンティズムの克服、文化の独自性、意味のある論争の土壌づくりなどを提唱した上で、持続的な聞き取り調査、史料収集のあり方など、県外先進自治体の事例を紹介しながら、「歴史における民衆の役割」「史料の現地保存」「私物(蔵)視の打破」等について強調しておられた。今さらのように感銘深く聞いたことを、そのときの仲地助教授

の若き風貌とともに思いおこしている。

ひきつづき、安仁屋政昭氏からは、「スカマ」など、その地域の生産と歴史の担い手と不可分に関わる「農村語い」について、また、石原昌家氏は、地域史研究の一環として擬似共同体組織である「郷友会」研究の必要性について、貴重な提言をなされた。

このあと提案事項の審議に入り、「設立に至る経過」真菜里泰山(那覇)、「設立趣意書(案)」中村誠司(名護)、「会則(案)」砂川章氏(浦添)の順で説明があつて、趣意書と会則は一括審議で可決された。ついで役員選挙にうつり、準備委員会の案どおり五人の運営委員が選任された。田名真之(那覇)、又吉盛清(浦添)、中村誠司(名護)、萩堂盛良(本部)、渡名喜元久氏(佐敷)らである。監査役には仲宗根(平良)が選ばれた。後日、運営委員の互選で初代代表に又吉氏が選ばれている。最後に中村氏の閉会あいさつで記念すべき設立総会は幕を閉じた。

(3) タイムスの出版文化賞

「平良市史」は、既に「沖地協」設立までに、「沖縄県史」や「那覇市史」等に学びつつ、第五巻資料編3(戦後新聞集成)、ついで第四巻資料編2(近代・戦争体験)と二巻刊行していた。ひきつづき第三巻資料編1(前近代)を刊行した上で、通史編第一巻(古代・近代)、同第二巻(戦後)の順で刊行予定であった。「沖地協」の設立によつて、それまで以上に宮古関係史資料の収集はもとより編集方法等についても、広く全県的な視野で見えるようになった。わけても大きな収穫は、人脈が大きく広がり様々な情報が得やすくなったということであろう。編さん事業の前途に意を強くしたものである。

もつともその後の平良市の修史事業は必ずしも順風満帆であったというわけではない。市長選挙があつて新市長が登場、手順に思わぬ

狂いが生じた。前近代など所定の資料編を終了しないまままで通史編を刊行せざるを得ない、「特命」状況がおきたのである。ともあれ変則的であったが、当初構想した資料編三、通史編二の全五巻の刊行を一応終えたのは、編さん事業開始後七年めの一九八一年三月である。

さいわい市民の受けもよく、この年の沖繩タイムス出版文化賞特別賞を那覇市の『沖繩の慟哭』とともに受賞した。「数ある市町村史の先駆的な、高水準の労作」(『沖繩タイムス』一九八二・三・九)との評価である。ちなみにこの年の特別賞以外の出版文化賞は、高良倉吉『琉球の歴史』野ざらし延男『沖繩の俳句総集』岡本恵徳『現代沖繩の文学と思想』の三著作である。

編さん委員会は第一次編さん構想の終了にともなって、第二次構想としてひきつづき資料編三巻の続刊を市長に答申したが、却下された。ほどなくまたも市長選挙がめぐってきた。市議会代表の編さん委員(五人)の一人として当初から関わってきた新市長の誕生で、第二次構想はほどなく承認された。こうして第六巻(戦後資料集成)、第七巻(民俗・歌謡)、第八巻(考古・人物・補遺)を刊行することができた。さらに資料編三巻続刊の第三次構想も承認され、第九巻(御嶽)、第十巻(戦前新聞集成、上・下)を刊行、残るは第十一巻(統計)のみとなったが、この方は市町村合併後の新市に引きつがれている。「平良市史」の資料編重視の展開は、「沖地協」の存在そのものも大きく後押ししてくれたと言っても過言ではなからう。

(4) 徹夜の宿泊研修(?)

「沖地協」は設立総会後わずか三週間後には、早くも伊是名村で初の宿泊研修会を開いている。安良城盛昭沖繩大学学長(当時、故人)を講師に、「伊是名首里大屋子あて辞令書をめぐって」仲里里主所をさぐる」をテーマにした研修会であったが、このときは日程の調整が

つかず残念ながら参加を見送っている。今も印象深く思い出されるのは、設立四年めの一九八二年十二月、今帰仁村中央公民館での宿泊研修会である。日程終了後も宿泊予定の座敷に席を移し、幾つかの小集団に分かれて、終日冷たい雨の降りしきるうそ寒い夜を徹して、酒をくみかわしながら地域史のあるべき姿を求めて議論がつづけられた。議論の内容についてはもはや記憶は定かではないのに、明け方近くまで談論風発した数人の面々の風貌は今も忘れ難く脳裡にきざまれている。黒島為一(石垣)、中村誠司、田名真之、ほかの面々である。

黒島氏は多くは語らなかったが、時折り琉球史の中の八重山の独自性のようなことについて語っていたように思うが、気がつくとその場で毛布にくるまって寝てしまい、しばらくすると又起き出して皆の話に聞き入るといぐあいであった。中村氏はそのころ名護に博物館をつくるのだと、地域資料を収集しつつ全国各地の博物館や資料館の情報を精力的に集めていた。その思いのたけを熱っぽく語っていたように思う。田名氏は黒島氏以上に寡黙で、コップを手にしつつ一同の話に聞き入っているだけのようであった。——それから20余年後のこと、何のきっかけであったか、そのときのこと話にのぼったことがある。そこで田名氏が言うのである。「酒は飲んでいませんでしたよ」と、20余年振りに初めて田名氏から下戸であることを知らされたのである。よくもまああの冷雨降るうそ寒い、冬の今帰仁のただっ広い公民館の座敷で、未明に至るまで水ばかりでおつき合っていたものだ、と。今さらのように感心したというか、驚いたというか、呆れたというか、なんとも名状しがたい思いにとらわれたものである。

翌一九八三年十一月には研修会場が初めて宮古に移され、宮古では数少ない自然の残る、人里遠く離れた大野山林内の県立宮古少年自然の家で開かれたが、残念ながらさほど盛り上がりなかったように思う。

今帰仁での印象がよほど鮮明に残っていたからそのように感じたのかも知れない。このときは下地和宏氏が「宮古の史跡」、仲宗根が「宮古の歴史と市史づくり」について報告しているので、今ごろこのような不謹慎なことを記す非礼を改めてお赦し願う次第である。日ならずして、平良勝保氏が『琉球新報』に、全県から集まった市町村史に関わる「彼らの、献身的な努力とあつい情熱が地域史をつくる原動力となつていると感じざるを得ない」と記していたことが、印象深く思いだされる。

一九八五年十一月には、我部政男琉大教授(当時)を団長に、金城功(県)、坂名城泰雄(石垣)、宮城篤正氏(浦添)ら総勢十九人で「沖縄文献委員会」を編成して、東京大学など在京各史料機関を訪問、琉球・沖縄関係史料の調査に参加した。宮城保氏(県・函)が事務局長として裏方の一切を取り仕切ってくれた。あいにく当方は出発当日那覇空港で乗りついで一行に合流するはずの宮古始発便が予期しない突然のストで欠航である。その上、終日空港で待機しても空席はなく、まる一日無駄にした上に合流し損った。八重山組は予定通り合流しているのである。何とも不運な話であった。

おかげで初日めの国会図書館、沖縄協会、憲政記念館は行けずじまいである。その夜、宿舎の若夏荘で初日めの日程を終えた一行の土産話を羨まし気に聞かされたものである。

二日め以降ようやく一行に合流、東京大学法学部法政史料室、同附属明治新聞雑誌文庫、マイクコロピ―三景(以上二日め)、国立公文書館、宮内庁書陵部、法政大学沖縄文化研究所(以上三日め)、外務省外交史料館、防衛庁(当時)防衛研究所図書館(以上最終日)をたずねた。1904〜05(明治37〜38)年の日露戦争中、いわゆる「久松五勇士」が石垣島の電信局から大本営に打電したという「ロシ

ア艦隊発見」の電文の写しならぬ現物を初めて見たのもこの時の調査である。三日めの夜は、高円寺の小料理店(?)に明治新聞雑誌文庫の北根豊氏ら各史料機関の関係者をお招きして、交流会が催された。日ごろお世話になつてゐる早稲田大学の鹿野政直教授もわざわざ逗子のお宅から駆けつけて下さるなど、感激の一夜であった。

酔いもほどほどにまわつたころ、金城功氏推せんによる司会からの突然のご指名である。沖縄文献委員会を代表して、今回お世話になつた史料機関の皆さんに「謝辞」をかねて閉会のあいさつを述べよ、と。いやはや、ホントに指名されたのであろうか、と周囲を見まわしながら、オズオズと立ち、冷や汗をかきかき謝辞らしき言葉につづけて、これをご縁に、さらに交流を密にし、今後とも沖縄県・市町村の修史事業の発展のために、史料はもとより情報の提供など、ご協力をお願いします旨のあいさつをした。

——こんなふうを書いてみると、際限もなくつづきそうである。「沖地協」設立にさきだつて、作家の大城立裕沖縄史料編集所長(当時)と大城康洋氏の三人で参加した真冬の寒い山口県での「全国史料協」の設立総会や、「伊波普猷生誕百年記念事業」(「講演」と「資料展」)等についてもふれたかったが、これらは別の機会にゆずることにした。二つともに元「沖地協」代表の外間政明氏の父君・故外間政彰氏(当時那覇市史編集室長)の呼びかけで関わった事業である。長電話の、とても辞退できそうもない、琉球・沖縄県史研究に寄せる熱い思いから発する独特の口調に、否応もなく承諾させられた。経緯はどうあれ、結果的に今につながる収穫の多いよき多くの出会いであり、よき事業であったと感謝している。

(5) 「沖地協」こそ支え

旧「平良市史」は、「政変」で有能な賃金職員を失うなど、幾度と

なく継続不能かと思われる苦境に立たされた。そのような危機を乗り越えられた背景には、今は故人となられた在沖宮古郷友の先輩方はじめ、心ある市民各層の励ましにくわえて、「沖地協」とそこに結集された全島の市町村史、地域史に関わる仲間の存在も大きかったからだと考えている。感謝するばかりである。また、「個人会員」としての身分(?)も、退職後の入会ではない。「沖地協」設立当初から機関(平良市史)加入と同時入会である。これも設立準備段階での、外間政彰氏のおびかによるもので、故人の「沖地協」設立への思い入れの深さ(?)に共鳴して三十年、在職中はもとより、退職後もそのまま継続している。

最後にひとこと。どのような組織であれ、事さら言うまでもなく裏方(事務局)があつてはじめて成り立つものである。表面上如何に華やかでも裏方が弱ければ成果は期し難い。その数少ない例外の一つが市町村史の編さん事業であろう。周知のように、「沖地協」に結集する市町村史はみなすばらしい成果をあげている。裏方は大方身分不安定な嘱託か賃金職員であるにもかかわらずである。「沖地協」は研修の充実とともに引きつぎ関係機関への働きかけなど、その面への配慮―職員の身分保障についても見落とすことなく頑張ってもらいたい。

「沖地協」設立三十年、おめでとうございます！

(「琉球・沖縄の地域史研究」二〇一一・五・二七)

12. 「宮古郷土史研究会」設立45年！

宮古郷土史研究会は二〇二〇年四月、設立四五五年を迎える。県立図書館宮古分館(池村恵祐館長)の一九七三年(講師・下地かおる)、一九七四年(講師・宮国定徳)の二年にわたる「郷土史を学ぶ会」を

へて、受講生を中心に三一人が参加して、一九七五年四月設立されたものである。当初の一年間は分館の事業として位置づけられ、現在のように毎月一回会員の研究報告を中心に研究会を開き、二年めの一九七六年四月、三五人の参加で改めて会則を制定し、役員を選出して現在に至る研究活動をつづけている。

当初の役員は、会長・宮国定徳、副会長・大山春明、運営委員は八人で、平良好児、吉村玄得、池村恵祐、仲宗根恵三、平良新亮、仲宗根将二、岡本恵昭、下地和宏、事務局長・砂川幸夫、書記・砂川美恵子、監事・座喜味盛紀、羽地栄の二人。設立四五五年は矢張り歴史といえよう。大方は物故し、現在も会員を続けているのは、砂川幸夫、下地和宏、仲宗根の三人のみ(会員では下地利幸氏を加えて四人)。

(1) 一般対象の出版物

当初設定された事業計画は、1郷土史の調査・研究、2聞き書き・資料収集・調査活動、3研究に関する紹介(文献等の購読)、4「会報」の発行、5研究発表会の開催、6会外研究者との交流、の六つ。この四五年いずれも一貫して取りくまれているのはなかるうか。毎月の研究会は一般公開できちんと開かれ、「会報」も会内外への貴重な情報誌として隔月に発行されて本号で二三六号、研究成果をまとめた「宮古研究」誌も設立四十年で十三号をかぞえている。

その間、早くも一九七七年には一般対象の「史跡めぐり」に活用する「宮古の史跡をたずねて」も発行されている。一九八五年からは市民総合文化祭の郷土史部門として一般対象の「史跡めぐり」で参加し、一九八七年には「人頭税史跡めぐり」、一九八九年十一月「宮古の史跡をたずねて」、一九九五年一月「宮古の戦争と平和を歩く」等を公刊し、誰れもが単独でも史跡や戦跡をたずねられるよう便宜をはかっている。「史跡をたずねて」は好評で、三刷まで出して一九九九年十

月、その後の研究成果を反映させて一三五頁の部厚な「新版 宮古の史跡を訪ねて」へと発展させている。

(2) 他研究団体との交流

古文書の読み合わせ、解説にも力を入れ、宮古旧記類の宮古島記事仕次、御嶽由来記、雍正旧記、宮古島記事をひととおり終えたあとは、「与世山親方宮古島規模帳」を五十余回にわたって読み合わせ、理解を深めている。古き宮古を知る「古老の座談会」や一般公開の研究発表会、シンポジウム等も再三開かれ、八重山の研究者との交流はじめ、他研究団体との交流・共催も数多く催している。

沖縄国際大学南島文化研究所、琉球大学史学会、八重山文化研究会、南島史学会、首里城公園友の会、宮古の自然と文化を考える会、奄美・沖縄民間文芸研究(学)会など、きわめて多彩な交流である。

(3) 会員延べ一七三人

このように地域に根ざした研究会活動の中間総括ともいえる「宮古郷土史研究会三五年のあゆみ」が二〇一一年五月に刊行されている。本稿の大筋もこの「あゆみ」に依拠しての執筆である。定例会における会員別の発表年月日、テーマはじめ一般公開の研究発表会、シンポジウム、他研究団体との共催による発表者、テーマなどすべてが網羅されているばかりでなく、当時の新聞報道、研究誌「宮古研究」への協賛広告団体(個人)、会員の動向まで記録されている。ちなみに三五人から出発した会員は、その時点で延べ一七三人、当初からの会員は五人、現在は前記のように四人である(現会員三〇人)。

研究会発足当初の会員には県の宮古支庁長や警察署長、公立学校長、銀行の支店長など社会的知名度の高い多くの先輩方もおられた。高齢になって、生まれ育った土地の歴史を知りたい欲求にかられたのだろうか。戦中・戦後のドサクサからようやく世の中が落ち着いてきて、

地域史への関心が一層高まり、研究会設立が待ち望まれていたともいえようか。

県内でこれほど長期にわたって活動している研究団体はそれほど多くはないのではなからうか。「沖縄学」の先駆者らによって戦後間もなく東京で出発した沖縄文化協会は別格として、思いつくいで挙げてみると、琉大史学会、沖縄考古学会、八重山文化研究会、南島地名研究センター…などであろうか。

(4) 名誉ある受賞

宮古郷土史研究会のこうしたじみだが地域に根ざした誠実な研究活動は早くから注目されていたのであろう。早くも一九九一年十二月には、第二十回平良市社会教育研究大会で、「社会教育功労賞」を受賞している。ついで一九九三年七月、宮崎県椎葉村で開かれた第七回柳田國男ゆかりサミットで、「第一回柳田國男ゆかりサミット賞」を受賞し、さらに一九九五年十一月、「沖縄文化協会賞」と、名誉ある賞に輝いている。このような評価は、歴代会長はじめ役員の方々の努力とともに毎月の定例会にしっかり参加している会員一同への励ましでもあろう。今後とも研究会活動を大いに深め前進させましょう。

宮古郷土史研究会設立四五年、おめでとう！

(「宮古郷土史研究会会報」一三六号、二〇二〇・一・一四)

